

きょうくん ぐう わ 教訓のある寓話：クマのボリス

(アフリカの古い寓話に基づいて)

ひひょう しょうさん だれ かんが
批評や称賛をしているのが誰なのか、よく考えてみよう。

「悪くないぞ。」 おお かがみ まえ うし あし た あ からだ
大きな鏡の前で後ろ足で立ち上がって体をゆすり
ながら、大きな若いロシアの黒クマのボリスがつづやいた。「もう1度
やってみるか。」

ボリスがMP3プレーヤーのボタンを押すと、チャイコフスキーの
『くるみ割り人形』の続きが流れた。そこで、ぎこちない様子で片足で
スピンしようとする、とおむけに転んでしまった。起き上がって
さらに何度か挑戦すると、やっとのことで、ワルツの基本の最初の
ステップができた。

ボリスはつづやいた。「上出来じゃないか。賢いサル友達ガリバル
ディに見せられるぞ。彼のオルガンのリハーサルも、そろそろ終わった
ころだろう。」

MP3プレーヤーをかかえ、うめぼれた笑みを浮かべながら、ボリスは
ドタドタとテントから出て行った。

あわただしいサーカスの団員達やらトレーラーやら色とりどりの
テントの間を通り抜けると、ボリスは、牧場に沿って広がる草地に着いた。
そこには、赤と金色の刺繍がほどこされた、いつものピルボックス帽子*に、
おそろいのベストを着た、ガリバルディがいた。彼は柵の上に座って、
バナナをほおぼっていた。

*ピルボックス帽子：小さい円筒形の縁なし帽子

「きれいな夕焼けだね。」と、ガリバルディが言った。

「ああ。リハーサルはどうだった？」と、ボリス。

「まあまあかな。ぼくは飲み込みが少しばかり遅いって、ジャコモに
言われたよ。だけど、彼は今日、できたばかりの新しい曲を使ったんだ。
ぼくが全然知らない曲をね。」

「ふ〜む。それはずるいよね。」と、ボリス。

「そうかもしれないけど、主人を責める訳にもいかないな。正直言うと、
ぼくは最近、なまけてたんだ。だから、もっと練習しなくちゃいけないって
ことさ。『練習することで完璧にできるようになる』って言うだろう？
バナナ、食べるかい？」

ボリスは首を横に振った。

「で、どうしたんだい？」

「ダンシング・ベアー・オーディションに出るために練習してるんだ。」
と、ボリス。

「本当かい？ ニキータは認めてくれるかな？」

「ああ。圧倒されると思うよ。モスクワ・サーカスだって入れるかも。」
「すごいね。野心満々じゃないか。」

ボリスはニヤリと笑った。「ぼくには夢があるんだ。この
安物のオルガ・カザコフの巡業サーカスは、本物のカッコいい
サーカスとはほど遠いからね。」

「それはどうかな。ぼく達は小さなサーカス団だけど、行く
先々の村で、テントは満員になるよ。それに何よりも、子供達が
大喜びしてくれる。それはともかくとして、MP3プレーヤーを
持って来たってことは、実演して見せてくれるってこと？」

「そうなんだ！ 君の感想を聞きたくてね。」

『くるみ割り人形』の美しいメロディーがタ方のそよ風に
乗って流れると、ボリスは何度か転びそうになりながらも、
不器用ではあるけれど、誇らしげに、初心者の方のワルツの
ステップをおどって見せた。

「さてと。どう思うかい？」 最後には息を切らしながら、
ボリスがたずねた。

ガリバルディは顔を曇らせた。息を吸い込むと、済まなさ
そうにほほ笑んで言った。「正直に言っているのかい？」

「もちろんさ、ガリ。君は友達だもの。君の意見は大切なんだ。」

ガリバルディは眉間にしわを寄せ、小さなフォークのような
ヒゲを引っ張って言った。「そうだなあ・・・最初にしては、
とてもいいと思うよ。」

「最初にしてはとてもいいって、どういう意味だい？」

「その言葉通りのことだよ。君には素質があるけど、もう
ちょっと練習が必要だと思うんだ。いや、本当に正直に言う
なら、もっともっと練習したほうがいいと思う」。



ボリスの目は怒りに満ちた。「君は自分の言ってることがわかってないね。ぼくは君とちがって、振り付けを真剣にやってるんだ。結局のところ、君はただ、くだらないおふざけでウンパツパってやってるだけじゃないか。」

ガリバルディはもう1本のバナナの皮をむきながら、しんぼう強く言った。「確かにそうかもね。だけど、子供達は笑ってくれるし、自分では、けっこうよくやってると思ってるんだ。」

「あほらしい。」 そう言うと、ボリスは怒って牧草地を勢いよく出て行った。

「ニキータはクマのベテラントレーナーなんだ。きっと気に入ってくれるさ！」と、ボリスは肩越しに叫んだ。

「もぞろん、ぎに入っで もらえるぞ。」 牧場の柵の向こう側から、ズルズルと大きな音を立てながら、甲高いガラガラ声で言うのが聞こえた。ボリスが柵越しによく見てみると、そこには、臭い肥やしや残飯にまみれた巨大なブタがいて、腐ったリンゴの芯を頬張っていた。

「今、何て言ったんだい？」 ボリスは鼻をつまみながらたずねた。

「ニギーダが ぎに入っでくれるだろうって言ったんだ。」 ブタは、

口をピチャピチャさせながら答えた。「さっきの ギミの バフォーマンスを見てんだが、ギミのサル友は、派手な帽子をがぶっで、ワゲの分がらんごどを言ってだっでござさ。」

「つまり、ぼくは練習する必要がないってこと？」

ブタは笑って言った。「いやいや、そういうごどじゃない。気楽にやっで、心配すんなっでござ。ギミもオレ様も、よくやってるっでござよ。」

ボリスは鼻をつまみ、ゾツとしながら、しばらくブタを見つめていたが、「ありがとう」とつぶやいて、ゆっくりとその場を立ち去った。

日もすっかり暮れ、ボリスはサーカステントの灯りに向かって歩きながら、今日見たブタの姿や音やにおいのことを思いながら、ガリバルディの助言について考え直してみた。

「やっぱり友達の言うことが正しいよね。練習が完璧さを生み出すんだ。」 そうつぶやきながら、ボリスは、オルガ・カザコフの巡業サーカス団のダンシング・ベアー・オーディションを受けるには、少なくとも3か月間は真面目に練習に励もうと決心したのだった。

文:ギルバート・フェントン 絵:ジェレミー デザイン:ロイ・エバンス

出版:マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2020年、ファミリー・インターナショナル

"Fortifying Fables: Boris the Bear"--Japanese 関連の読み物はこちら ⇒ 子供のための物語、批判的な考え方、教訓のある寓話